20230319 レムナント教会 1 部

実るいのち(マルコ 4:10-20)

イエス様を信じて教会に通っているものの、目に見える結果がなかなか見えないし、特別な変化などないなと思ったとき、福音そのものを自分のレベルで生半可に評価して、信仰がドライになってしまいます。それで期待も希望も夢なども持たないでドライな状態が続くようになります。聖書には信仰と希望と愛を語っているにもかかわらず、その信者の信仰の状態はそのようなものになる危険性があります。なので目の前にある結果に左右されずに勝利の道を歩むためには、福音をどのように理解すればよいのでしょうか。イエス様は今日のマルコ 4：1-34 までにおいて福音と神の国について語っていらっしゃいます。このイエス様のお話を通して、福音に対して本質的に正しく理解することが求められます。

1. まず第一に、福音の始まりはみすぼらしいものに見えます。福音のスタートは大した物じゃないと思われるほどみすぼらしく見えてしまいます。

救い主キリストであるイエス様がこの世に誕生されたときのことを思い出してみてください。宿るところがなくて馬小屋でお生まれになりました。それで皆「それは何？そんな大したもんじゃないね」とつい思いがちです。そして、イエス様が本格的に神の国と福音について語り始められると、それを聞いていたいわば世の勝ち組に当たる人々が、その福音のお話に反対しました。例えば、お金持ち、また知識のある人、成功者と呼ばれている人々は、イエス様の話を聞いて「それは話にならん。けしからん」というふうに軽視する反応を示しました。なぜかと言いますと、彼らが金持ちになるために、また学者になるために、世の成功者になるために握って、そして、それに乗って走ってきた世の理論や世の法則、また世の価値観などから見たときにはイエス様の福音のお話は全く噛み合わないものなのです。何一つ噛み合うものなどありませんでした。なので「けしからん」と言うわけです。そうすると普通の人、一般の人は、勝ち組の方からそういう反応を見せるので「そんなもんかな」とついつい思います。それから、ある時はイエス様の方に大勢の群衆が集まりました。しかし、彼らも自分の願いと自分の欲と合わなかったので、結局はイエス様から離れていくことになります。それを見てやっぱり福音というのは大したもんじゃないなというふうに思うでしょう。イエス様が今日、種蒔きの例え話をされたときに、道ばたに種が蒔かれたこと、岩地に、またいばらの方にみことばの種が蒔かれたときにどうなったのか、というお話をされましたが、そういうことなんですね。だからそれを見て福音はそんなに大した物じゃないとついつい思うかもしれません。それで結局、イエス様の周りに残っているものは負け組ばかりなのです。それでその群れを負け組の集いのように見てしまいます。貧しい人間、また病気の人、失敗した人々、社会から疎外されている人々、また後ろ指を指されるような立場の人間ばかり集まっていて、ある時はパリサイ人たちが「イエス、あなたはなぜ罪人と一緒に食事をするのか」と非難するほどでした。だから福音はみすぼらしいものに見えて馬鹿にされがちなスタートなのです。そして、結局、初代教会は 120 人でスタートしましたけれども、その 70%以上は女性でした。今はそういうふうに言っていては大変なことになりますが、当時は女性は人を数えるときに人数に入らない、そういう文化でした。70%ぐらいが女性で、残りの男性も下っ端をくぐる漁師や売国者と呼ばれている人ばかりだったのです。だから「あれ、何？」と皆が思うでしょう。それが福音だと勘違いするわけです。パウロも I コリント 1：26 でコリントの教会に向かってこのように語っています。
〝兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。〞

「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか」。なので一瞬、教会や集いを見ると「あれ、何？」と思うしかない、そういうスタートなのです。だから福音はそんなもんだと世の中は勘違いするわけです。イエス様は今日の例え話の最後で、からし種の例え話もされました。からしの種というのは肉眼ではなかなか見えないくらい小さいものなのです。福音はそのようにスタートするものだということをおっしゃっているわけです。なのでパリサイ人や宗教指導者、世の中の偉い人々

は、キリスト教会、福音などは踏み潰すことができるものだ、また踏み潰しても結構なんだと思って、実際、歴史の中でそういうことが繰り返されていました。問題なのは、教会に通っている信徒の私たちも福音をそのように価値のないもののように誤解してしまうということなのです。なぜかと言いますと、福音の始まりはそんなに大したもんじゃないなと思われ、みすぼらしいものに映るからです。しかし、イエス様が今日、種を蒔く例え話をされたのは、福音はそのように見えるでしょうけれども、実はそんなもんじゃないんだということを説明されるためでした。福音はいのちなんだ。だから種を蒔く例え話を用いられたわけです。

2.福音はいのちなので、必ずいのちの実を結ぶものだということを強くおっしゃっています。

イエス様ご自身がおっしゃいました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」とおっしゃいました。（ヨハネ 14：4）それでヨハネ 10：10 を見ますと、「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」とおっしゃいました。福音を受けるということは、ただお話を聞いてどこかの団体に属することではなくて、いのちに預かることです。いのちをいただくことだとおっしゃっています。それで福音を受けた者はその始まりがとても大したもんじゃない、みすぼらしいものに思われるかもしれませんけれども、あなたがたは聖霊が宿る神の神殿ではないのかと言われる神の神殿に変わるようになります。ローマ 8：2 にも、いのちと御霊の原理によって、その聖霊が内側にいらっしゃることをいのちと言います。いのちと御霊の原理によって死と罪の原理から解放されたとおっしゃっているわけです。今日の聖書の 20 節を見ますと、だからこそ福音そのものは、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、30 倍、60 倍、100 倍の実を結ぶ人たちです。福音というのはみすぼらしいものに見えるけれども、それがちゃんと心に蒔かれたときには 30 倍、60 倍、100 倍の実を必ず結ぶものなのです。からし種のように見えるからと、そんなに目に見える結果がすぐに見えないからと馬鹿にしてはいけません。生半可な評価をしてはいけません。福音はいのちなので必ずいのちの実を結ぶようになります。どのようにいのちの実を結ぶようになるのかと言いますと、まず福音を心に受け入れた人の内側から変わるようになります。それが実を結ぶということです。信者の私たちの内側が変えられるそのような実を結ぶようになります。どのように変わるかと言いますと、福音、いのちが信者の内側で実を結ぶようになりますと、まず信者は自分の過去から完全に自由になります。なぜかと言いますと、その人が「イエス様を信じます」と告白するだけではなくて、自分が信じているキリストのイエス様が Only だということが分かるようになります。それがいのちが実を結ぶということです。まず、自分の内側で Only キリストになるので、今まで心の傷だったもの、失敗したこと、恨みつらみなどがすべて感謝に変わり、それが人生の勝利のための土台に変わるようになります。そのようにいのちの実を結ぶようになります。そうなるので、その人が生きる今日の現実に対して、今までは問題と環境と状況などに振り回されるようになっていたものが、そこで神の主権を認めることになります。それを神の国を味わうと言います。今までは現実そのものと格闘していたものが、いのちが実を結ぶことによってその現実と格闘するのではなくて、神の主権を認めることになり、それを超越することができるようになります。今までは人に左右され、人の言葉に左右されていたものが、神の国を味わうことで神のみことばを求めて、神のみことばから答えを得ることになります。それが今の現実を神の国を味わいながら勝利するという意味です。そのような信者に内側から変えられることになります。福音はそのまま留まって動かないものではありません。いのちなので必ず福音の種が蒔かれた信者の内側が変えられることになるということをぜひ覚えましょう。今までは自分の弱点、自分の弱さなどに囚われていました。にもかかわらず、福音が蒔かれた人はいのちが動いて、その人を内側から変えてしまうので、その人は自分の弱さに全く囚われることなく、聖霊の力の導きに従うことができるようになります。超越して勝利するようになります。だから、今までは誰かのせい、何かのせいにしていたものが、それを超越する力が与えられます。周りから見ると「何？大したもんじゃないな」「教会に通ってもそんなに何も変わっていないじゃん」とついつい思うかもしれません。ヨセフも一番最初、いじめられて福音を持っているのに濡れ衣を着せられたりということがありました。しかし、周りの人が見て、そのヨセフの内側でいのちの実が結ばれていることを見て感動したわけです。必ずそのようになります。自分自身のために落胆しないように。問題と状況と環境のゆえに落胆しないように。人に振り回されることがないように。何かの誰かのせいにしないように。いのちに集中しましょう。神様が私たちに与えられたイエス・キリストの福音はいのちなのです。言葉の遊びです

はありません。宗教の遊びではありません。これがイエス様が今おっしゃりたいことなのです。その人の内側でいのちが実を結ぶようになりますと、当然なことにそのいのちの祝福が他人にも伝わることになります。だから、他人を生かす証人として変えられることになります。これがいのちが実を結ぶということです。32 節にこう書いてあります。「それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります」と。からし種は肉眼では見えないぐらい小さいものだったのに、それが大きな木になります。そこに鳥が来て巣を作るように、他人を生かすことができるほどになります。神様はこの福音に関わって召された人々の名前を変えられました。それは名前が変わっただけのことではなくて、その人の存在そのものがいのちの種を蒔くことができ、人々を生かすことができる価値ある存在に変わったというメッセージなのです。それでアブラムをアブラハムに名前を変えられました。ヤコブをイスラエルと名前を変えられました。シモンをペテロに。「この岩の上にわたしの教会を建てます」という意味でペテロと名前を変えました。サウロをパウロに名前を変えました。これがいのちが実を結ぶという意味なのです。神様がイエス・キリストを信じている皆さんの名前をどのように変えられたのか、皆さんご存知なのでしょうか。皆さんの名前はこのようになっています。マタイ 5：14 を見ますと「あなたがたは、世界の光です」。自分自身に今語られていることなのに、自分のこととしてなかなか思わないでいるでしょう。そこが問題なのです。皆さんが既に世の光として作り替えられているので、必ずこのような実を結ぶようになります。なぜでしょうか。皆さんの心にたましいに蒔かれたイエス・キリストの福音はいのちだからです。皆さんの能力とは関係ありません。皆さんがどのような環境に置かれているのかなどとは一切関係ありません。これが皆さんの名前なのです。ヨハネ 15：5 には「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」。ぶどうの木の枝と名前が変わりました。その枝は木がぶどうの実を結ぶのではなくて、枝に結ばれるわけです。キリストにいのちがありますけれども、キリストのいのちの実は私たちを通して結ばれることになっています。それがぶどうの木という名前の意味なのです。ローマ 8：29「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたち」、イエスのかたちという名前が付きました。イエスのかたち、イエス様と同じことができる者。なぜならこの土の器のような弱い私の内側にキリストがいのちとして入って一緒にいらっしゃるから、宝のキリストを持っているからです。これが福音なのです。誤解しないように。騙されないよう。その始まりがあまりにも大したもんじゃないと思われるからといって騙されないように。それで先ほども申し上げましたように、Ⅰコリント 3：16 には「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか」。神殿の意味は分かりますか。いのちの水があふれ出るところです。皆さんが学校にいると、その学校に皆さんを通していのちの水が流れ出るようになります。皆さんがそこにいますといのちの光がそこから出てくるようになります。そういう存在だとしっかりと分かってもらうために名前を変えられました。Ⅱコリント 5：20 にはこう書いてあります。「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです」。キリストの大使なんだ。つまりキリストの代わりですと言われています。これが私たちの名前なのです。もう一つ見て行きましょうか。エペソ 1：23「教会はキリストのからだであり」。キリストがかしらであって、そのからだなので、かしらのすべてがからだを通して実行されて現れるものでしょう。そういう存在だと。イエス・キリストの福音のいのちが蒔かれた人は、そのように作り替えられているし、だから必ずそのように実を結ぶことができるようになるとおっしゃいました。Ⅰペテロ 2：9 には、直接あなたがたは王である祭司と言われています。王のわざが、祭司としてのわざが、預言者のわざがあなたを通して現れる。キリストは今、私たちの目には見えない天の御座に座っていらっしゃって、私たちの内側にいらっしゃいます。そのキリストがどのように現れるのでしょうか。私たちを通してです。信じればいいだけの話です。福音を軽く思ってはいけません。福音を自分勝手に生半可に評価してはいけません。福音を馬鹿にしてはいけません。どんなことがあろうが、自分自身にどんなつらいことがあろうが、今、現実がどんなに険しくても福音そのものをそれによって評価してはいけません。福音はいのちなのです。そしてイエス様はもう一つ教えていらっしゃいます。

3. それが三番目です。福音は真理の光なので、隠れているものがすべて明るみに出てくるんだとおっしゃっています。

何が隠れているのでしょうか。福音の光が照らされるまでは、それがしっかりと隠されて誰も気づかないし、誰も分かっていません。ヨハネ 8：44 には、悪魔サタンは最初から偽りのものであり、偽りす3

の父だと言っています。私たちが心の傷に囚われて、憎しみ、恨み、誰かのせい、何かのせいにしてることは、それに当てはまる何かの事実があるでしょうけれども、実はその裏に偽りの父、悪魔サタンがいるということ知らなければなりません。誰も分かっていません。だから皆事実に囚われて、心の傷を抱えて恨みつらみの中で誰かのせいにしながら生きているわけです。福音の光が真理が明らかになったときにその裏に偽りの父がそれを捕らえて全部騙してるということが明らかにされるわけです。だから自由になるわけです。エペソ２：２には、世の流れ、偶像崇拝やヒューマニズムのような、進化論のような世の流れというものがあって、皆それがもっともな話だと思い、それに乗ろうとしているのですが、実は真理の福音の光が照らされたときに、その裏でそれを操っている空中の権威を持つ支配者、サタンというものがいるということが明らかにされるわけです。だから真理の光が照らされない限りはそれが正解だとみな勘違いするしかありません。福音を知らないということは、結局騙される人生を送るしかありません。また、Ⅱコリント 11：13-14 にこう書いてあります。「こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです」と。教会なのに教会の看板を掲げてイエス・キリストのいのちの福音でない、ただ人に感動を与える立派なことを語って福音を邪魔する教会があります。それでみな感動して良い教会だな、良い先生だなと思うけれども、その裏を見ると光の天使のように変装して操っている悪霊の働きがあるということが、福音が明らかにされるときに明るみに出てくるわけです。これが福音の力というものなのです。それで福音の真理の光が照らされることで、それを基準にして何が善で何が悪なのか、何が真理で何が偽りなのか、何が救いで何が滅びなのか、何が幸せで何が不幸なのか、何が天国で何が地獄なのかが明確になります。福音の光に照らして確認するまでの以前に持っていた価値観、考え方は全部捨てないといけません。だからこれが今申し上げました何が幸せなのか不幸のなのか、何が救いなのか滅びなのかを福音以外の他のものをもって天秤にかけるような真似はしてはいけません。福音は真理の光なのです。それが明らかにされます。だから騙されないで光の中を歩くことができるようになります。この地上に囚われることなく、地上のものに執着しないで、天にあるものに向かって歩くことができるようになります。福音の光によって何が本物なのかが明らかにされるわけですから。これがイエス様が種蒔きの例えを通して教えようとしていらっしゃる内容です。福音は最初みすぼらしいものに見えるかもしれません。しかし、福音はそんなものではない。そういうことで落胆したり福音を馬鹿にしたり軽く思ってはいけません。それでドライな信仰になってはいけないのです。福音はいのちなので必ずいのちの実を結びます。また、福音によって偽りが全部表に出てくるから、騙されることなく価値あるもののために残りの人生を歩くことができる。だからいのちに集中しなさいとおっしゃっています。

このみことばをもって、きょう礼拝を捧げている兄弟姉妹の皆さんは、パウロのこの告白が皆さんの告白になるようにしましょう。ローマ１：16 でパウロはこのように告白しています。福音が何か分かったので。この福音の価値が分かるまでは、パウロは福音を潰そうとしていたのです。「私は福音を恥とは思いません」。これは文学的に「誇りに思うよ」ということを２倍３倍強調するための表現の方法だと言われています。「福音を恥とは思いません」というのは消極的な表現ではありません。だからパウロは「私は福音を誇りに誇りを誇りに思うよ」。どうしてドライな信仰になれるのでしょうか。ありえません。福音を誇りに思いましょう。それでこの福音にあるいのちの祝福に集中していのちの力が働くことを祈りましょう。なんだかんだと文句を言わないで、言い訳など全部捨てて、いのちが実を結ぶわけなので他のことにこだわらないで、これだけにこだわりましょう。いのちの力が働くように。つまり言葉を変えますと、御座の祝福と力が自分の内側に働くように。そして、自分と関わってるすべてのところに働くように。これが祈りなのです。どこまでわざが現れればいいでしょうか。私が証人となれるくらいに。そうなるとおっしゃっているから。いのちの力が自分の内側に、心と思いと脳細胞とたましいに豊かに働くように祈りましょう。なぜでしょうか。皆さんがイエス・キリストを信じますと言っていたのは、皆さんのうちにいのちが蒔かれたことなのです。今までその威力を知らなかったのでドライなものになり、礼拝もドライに終わります。礼拝はすべてなのです。皆さんが心をオープンにしていのちの祝福にあふれ出て礼拝を捧げるときにみことばが刻印されます。テープなどで繰り返しメッセージを聞くことは根を下すことであって、刻印は集まって神様に礼拝を捧げるときに刻印されます。刻印されたものが根を下すのであって、刻印されない限りは働きは始まりません。礼拝のときに神のみことばが私に刻印されることを信じて感謝しますという思いで礼拝に臨みましょう。それが邪魔にならないように日曜日はあらゆるものをカットするわけです。いの

ちの力が皆さんの内側に、皆さんと関わっている勉強や仕事や人間関係やすべてのところに働くように祈りましょう。先ほども申し上げましたように、自分の弱さ、環境どうのこうのは問題になりません。必ず証人として勝利の道を歩むことができるので。からし種のように思われていたものが大きな木に生長するようになりますので信じて祈ってください。福音のほかに、この世の中にいのちはありません。どんなに立派な理論でも、どんな必要なものであってもいのちではありません。イエス・キリストの福音だけが実を結ぶ、生きているいのちなのです。イエス様ご自身がいのちですから。

　それで使徒 1：7-8、このみことばが皆さんの頭の中に常にあるようにしましょう。いろいろこだわることがいっぱいあります。イエス様がおっしゃいます。「それはあなたがたは知らなくてもいいです」。なぜならいのちが蒔かれているから。Only 聖霊が臨まれると、力を得て、地の果てにまでわたしの証人となるから。それで 14 節を見ますと「祈りに専念していた」と。その後どうなったでしょうか。彼らの内側にいのちが働いて、それがローマにまで、今の私たちのところまで実を結び、大きく大きくなりました。最初は「あれ、何？」と言われ、マルコのタラッパンに集まっていたみすぼらしい集団、踏みつぶしても跡も残らないような存在だったと皆思っていたのに。彼らの内側にいのちがあることを誰も分かっていませんでした。それが世界を変えるとは誰も予想していませんでした。そのいのちの福音が今、私たちのものなのです。信じてください。自分の価値を馬鹿にしてはいけません。土の器のようなこんな惨めな人間でしょうけれども、それが皆さんではありません。キリスト・イエスを受け入れた以上、私にはいのちがあります。最高の存在なので、このいのちに集中してほかのことに惑わされることなく祈るクリスチャンになりましょう。

（祈り）
恵み深い父なる神様。ありがとうございます。神様の恵みにより、いのちであるイエス・キリストの福音を受けて、神の子どもになっていることを感謝いたします。環境や目に見える結果などに惑わされることなく、このいのちに集中していのちが実を結ぶことを感謝して、いのちの働きを祈る信者になるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン